鶉衣　前篇

へ 5
1929
1

むかし安永のはしめつかた川のほとり
共楽精舎といひて世有翁の借於の新
とりたてゝしつらひありけるに雨そゝきたるをうつしかへり
侍りなるをみしよりも山家にすみ居住のこゝろの人あり
あそびにこのあたりに出てさいはひなれを
金森桂五うさきの君といふあるじ翁とはいへる
かの二まにをもてきてこそのへつり翁なく
ありやうをきゝてさて司馬相如か古のことをふみ

ちやあまた申しけるに細井甚幸天卧
布川に託してその門人紀六林のうつしをとる
金竹をおくれりまたりてうちうたにうつし
みゝきしてよくよくとみに梓のきざみ
命しくおもむせを世上にむせきあまねく翁乃
文をとりや鈴をときてうつおもひしけれ
ある神とまくにおしくよく人のむさ
うつしよく京の外に転へ髭こまる乃

百むさをひくるうつるこそのむほし
てらるゝ乃りみちてのこゝろにあくる
さるあや我みよけるみまえしうきしきを
おへてうらをつりうむせてしてみやいを
にくまむをむせにあるいつ年結りな

四甲山人

あやしくもてなき笑れくゝをあつめ
てかゝるをうつら衣とはいふなり
さるを騒がしきをあつめ給ふらく
かくいへるもかゝる人にはちかう侍る記
そのよしを

世有

うつら衣

奈良団賛

あをによし奈良の帝の御時いかなる叡慮にあつかりてか
此地の名産とはなれりけむ世はたゞ其道の芸にかしこ
くとも多能はなくてもあらまほしかれよかしこくも風を生
する外はさらに能もなくて一曲一手のたしなみもあはれなれ
腰にさまれて公界にへつらふ往ちかひもなし木の端
とさげすてらるゝ雲客の生涯なうむさるは桐の箱の家居
末をいさゝかも夕すゞみ豆ねの枕に宿直して人
の心よ秋風にてきまさ来る夜をみむともえくにも世
乃片隅に紙屑籠とおなじく嵐のふけさるれとも
地にはまくられて世さらしとなる扇にはまさりなむ

我汝をむかへて汝我に馴く、なつかしみ姿をあら
はしこ人にかゝるものなかりし

蓼花ある日ハやとりまいる園にて

蓼花菴記

一 ちかの芭蕉五株の柳乃其人の徳によりてうへられしハ
桃青名をとゝめしもあるに不仕合なる桜木ハある俳匠の
号に呼れて渋加に斧の怒をうけりなは切杭埋地の
名をさへ流しむ我剣冠乃仕途に身を並なる一の
隠家ありこれを蓼花菴と名つく蓼花にむつましき
心ハあられと夕日転寄の氣をむかくなるまゝの一ト
乃まゝりなきにもあられ松茸さふの匂きけるさ後成

つゆ乃庭にあせもなつかしく世にもひちるゝさ身れおもしけ
あはれそふゆかはしさしる名をとせりさくも此幽栖なにゆかりの郷
なとをすて山に向ひ海にそひ河あり野あり月雪花鳥
四の時の詠を供し時になる松の夕風竹の夜雨の音まても
きくにいとおかしきものあらは塵市を出て遠
からぬに人多く杖草鞋をかてふむとせし老らくへ方士の
まゐりふるも出来ても此縁の山かと牧立る門に迷ひくふ世盛
のその本の寝に梱みとられけりはの山窓の石とふへき人にも
あそてかよひ桃源に棹さそてこゝくなむさる林の香
香もちりてさかならいふへき人なくて今も奥入にかる
あらん茅門とふ寄るへしとなり

物ちきの出いきてなけ蓼の花

長短解

大ハよく小をかね短ハ長にまさらすとし世にいふならひ
多かるハ君を祝し人を壽くめてたきためしとも濱の
真砂のかすへあるハ亀の尾山の尾を引くみる八十七曲
と祝ひその志るしにハ短くかさあくしらしその余ハひとく
あるに十八さらけの中さけきにあらへて独活の大木の譬
をのかれても矮雛の足にハみしかきを愛し飛ヶ丘の辞ハ
あかきにのとけし出る杭かしらうたれとはねの益なく
下手の談議のとまりかねてハ軒の柳も祇園の負ちあり
さて女の髪こそなてらてあらましをよきあかき人そ
一門にも遠さけられ鼻の下のみひろさるハ大てつのお狭
にかゝる甚夜の盗跖のあかきをもちてされと必

あかきふくらしをきそ上みにも立さるし抄ハさて秋の夜のなかく
しなかきむハ長く難波潟みしかき芦の表からそして
なきハよしなくてあらなんされと聖人も衣の袂の自由
を短そけり世に式法をこそ守りにさまかえて其合輕るもの
もあれかとそのむつかしき境ハ人の製作あり天地おのつから家屋
なかそ長短ハ自然にそなへてすかの論議ハなし揚粉木
ハ長すしに撞るを種とし杓子さいは短かさを手にたらよし
下さりの折あかりる天秤のまくなるそたくとよ我友田氏
志ゝし比かりその短れつゝに煙管を携りその短き
こそ営にへし我この秋西郊にあそひのありて
詞宮を短さ長きにまされり是をもつてかまとかくるそ
久しくして歯を労ちて長く山を雲を吹あくる時ハ

袂におさむ張子かるを瞳にもるかこつくしこゝろにおもひく
感ありつゝわかに老經の解をつくりてたうとむかの詞に
加ふ其辞のちとらるハまさ才のみしられ有なるへし

木履説

木履ハこゝ笠ハ東坡か書の世かけの几に老ろうておもある
へきれなりや汝ハ夏の日の宰予か秋にも雇ハれさる日和
つきて傑形る時ハ稼の下に森こそひ黄の葉散るとも
あひ又ハ雨の杖にさし出て日傍の繋にふらつきてハ
てらくまてれ円をもえうてむさ多くか時子きのつま
とりにまかれくるうに人を見るおもうれるもあれと常ハ
沓ぬきにひさはつき洗濯の日のこしみけとありてそれ

より我の交ハ老つうをかく下駄の音のなかうか狩人の
笛となりてハ呆にありてしもあとや其の鼻の余
を断るハ罪ふるきゝ身の果なれと傳も下駄もおもし杰の
きみにて例の一体のまかりしに違ひてましあて梅山の鼻緒
ハきれてん柳足くうきものを木履足駄とはちしさけ
傾きをと下駄といへるハいつれ一体にありしてこゝにする男の
差別ハあかれて俳諧のうへにこゝの姿を論ちへくハ
おもひとくと辞ありに音律の調ありして下駄くとは
しきふなかの雨の夕話あるへし

鳥羽絵賛

蝦蟇の息に虹を起し蜃ハよく楼臺を吐蔽虫の虫

氣を吹く声を出さるさるにあやしき足さみハうたへる店
くさなもあくひもおろしものあらんよかれか坐所のいやし
ける覚悟これとつしみさくうく公界の嘖とは
されを退きくか嗜枯つくしても此海法なきハかしらう
ましまてあやあるらんさの嗜こそと不平ふもみきされ
さ盛親僧都の芋の服味あるハ麦飯おかなら茯苓の三合
みささそいれ勢ひこそに甚しもりし志安記の安楽請に
ちしおて覚と申りしそあなるよりつねに鎌倉に嗅つけ
られし七日の説法居一字にて砕きなれとはてハ貧胡
後基の屁債ひ法丘尼とあゆるまてハ雑混淆の
からりにわりし喜く女番して包えむと云人ハよくも塗
しらぬよ家相の綿正乃年あるもひとへよとなれの主

あくにかの音あれとも聞に云くしおもにあらあらくある
あなたの八丈に電光石火はまかれるをまて人につなかき
世のこそりりをさ去くしあむとなるへし

掃箒傳

俵おのらおくひとりのお女ありあかさるひらわた出生
あうら姿ハ名をまき富士の裾によりて片山里に朽
ちらん身をうきとのみやさひそとなんくる舟の綱につけて
楽く都の市中に出てくまるよしある店先に立そしたつき
とすなれるに師走の末ゆそうしくあの出家と風のさそひ
うたはハ世も煤掃のつるきとせて揺られ新宮を求る
まつれとくある甚下によきロをありてくる仕の極めて揺木

ときへしかくにうら合せのま姫とはかりなりけれを
柏木のたまつみも似せて松木のあつらへ身しき男ふりなり
おもかげうつしきこえみるの鏡あやうけれど女もいと慕ひ
なく明られいそうしれつゝありあつかしきよさりきて
とうく白たへの衣いろくまて翻弄のたゝみれぬ中しと
なうひなかくさしとふちまりけるよるの比ちうひとらひ
しあのこい檜のきみ本目細うよるの姿やさしきうち昔ハ
御所ようらひるの名なみも呼ありしかたのしつるの袂
ふるめ時ハ走るのなみころひねうちあるとよるのいろきれ
同ふかみつしよりきまても紅うき侍妾の中まちしき
あき同舘の口さし出杉子の曲り出よりかきる衣ミとき
炮烙さく仲ま砂なしくあけられ茶谷に並くられ

おら姫やまさひおろしのふて面となりくふもさら
うさ形く身をまくろ物の恥よう逢ありて買臣か妻乃
恥をもうしらねなつひの君子れむりしをそひつなまは去り
うへるへきを出屋をや鍛しなもある衣鼠のあたまきれ
に棚の端より身を投けるふそ恥なきしらけ換しえふく
ぎまての姿みハうすりなるゝくてハ合ね無のつらき叶ハしそ
まゝしの契りをみちくし石漆の如薬子か及なくて妹背
の中もうらうみに内庭まて下られとも程さみられの
おく八雨ありの役よつらちなみてもいく長門の涙かふく
條形くこつふもさうりあしくなうて井戸端よころ
うり出葛葉に埋みて復ひされ哀とよ人もなかり
しふれと形く露霊もなかつり壁の出の声も

途中く比なりんるちられ寺の門書よひらかれたるに
茶屋ふかくかくれなかりけ火鉢にさし名ども、
湯をあたゝめ茶をすゝめしこそいとふかさと思ひ
めやく壺筒に梅もちりくきたゝきみ炎もしら見え
ちる灰をさく打あけられ唐からしもそるなと植
られしかゝき月ありしさてあるはあるへきをとれさ
秋の比ろをとりつかは桔つかの塵塚によされなし
果はさるあき寺のまこととれくさか途にれ味もたち
園の東の礫とはなりるとそ

武陽官邸記

百里の海山をきりなくこえて来る国のはこゝて一年乃
起臥にも新枕のさまなる心地をしてしかりけるよあまた
たびは都の月をさしのぞく森かよきに若もむらすゝき
にはなかりける江戸をまくりの原にうちかけれ調度とものうく
つけぬく常の居所に定めつ庭には二三間に穴茂なるを
乃場とすきまくのこれ添へつかまつれに訪植をてし
一かとのつゝ(石楽)二かよのつくし花は時なくあれ葉つまとふ
我ものと顔なることもちとも植かへなとして絶ゆ乃
あはれくもうき身のなきもなかりける新れ
風給ふ愛山のさびしさを招きし雲のやかれよりゆ風の音
松し津子のたよりあをしきをとられをみけく月の
夕暮なかるを思ひるかの行平の須磨の住居もかくやと
思ひ出らるゝありしろの松風さわがしく吹なかれをはなみ

こゝかしこにうつりかはりて今ハ西のかたの二階窓に居
るも梢さしおほひてなきにしもあらねども富士ハ
其の方にくまなくかきくもらす屋根ちかくみえて時
しもあれ雲をあふぎて常ににながむるにまさるハまれに
きこゆる念佛ハ目代寺代寺のりあるハ木魚のひゞき
遠くに聞ゆる金の佛にきこゆく建立せられしかたのかねのおとかうしく
比丘尼ハ赤坂に出入れ情をかけてもさてもあはれなるさま諸
を引つれ辻君ハ白きをうる誰かまたとふらんとあかつきに
よびかへされど心の動へくもあらねば薄ハ一本の雲
をへだて朝の火打の音ひゞくより拍子木にうつ桴の音も
たえざる日のつとめくるしも紙帳に團扇を遣ひつゝ
まで出るところに物のかくれしかもこゝにも又くらぬる

ありがたきことなるべし日影のさしこむ所に徒者どもの來て居る所に
貧乏神にとりつかれしを拂ひて紅の秋を緑葉に刀豆
を這はせ蘆簾に藤蔓をからませて鉄砲の音をとほざくる
あまつさへ不自由のくらしを商人のかしこく餅を艾の
底に見せて酒に味噌桶の似せ物をかた身の門の外に
のせて花の蚊虫を忌むとて煮豆の鍋を朝夕の飯
時とかんがへ雨のふりしハ炎天をうるほすとおもしき
住家のさまかはりたる所に南無の雲を出づるとも煤拂
のやうにしらじらとならひあかしあけくれ戸一枚かかせて世六
めぐりけりなる事をもなすはかなきの人の外にして
我ハ故人の跡をもたとひ世わたりの心を額に動しくとも
来る人にも與へしとぞなる

餅辞

君か代や餅ハ例のおしこありてもちひ四時の流行
ありよりハてんせん初雪粉も行もあらさまへあらまほ
飯ハかとより右往にして茶麺類もちらけなみ
出て雑煮を越向を定めらるれ永代の骨折のとこ
あるへしそれより奥邑かしこひらき餅に朧月の定き
られて二月ハ彼岸の団子をそて花よりとよみし人も
ありしを草餅の節供に桃もちりまくてし山吹咲
かけ行まゝに端んちう青の葉か秋なくて実ハ味
墨を呼れて青雨つれくより出る此かき餅のいそ
焼なきかりのたゝる比ハ萩咲もちつくへき卯月ま

例の卯花くもりに故郷の香も芝にくや蛙好も新子
あらたく此ハ牡丹餅の花いとむまく千団子ときくも
さりとしや粽ハそのまくに入ていとまくしくさるる
行く例の白ひ又おしゑ六月の節日ハ氷餅として寒て
まきらかうをそて見しかる子学者もよう待く
右用の此水餅の錫鉢にうらひ出ると上戸の足らぬ
まことさかりを風も無月の寿られしくしもへ乃
あわ秋ハみれのをなまくる子のこの餅もまいらせあハ葛餅
乃らくみなかく子の節れもしとよみしもやらかちとさけを
串くし課ありも雲ふ子おゝりもて萩秋の花に秋も
さけくるかちかち月の団子より雲れ子餅の二日目も
ふられを十月ハかくより亥の子の餅に女房ハ初くハ時雨に達

乃なとまゆ子犬神のおくのやき餅もたけしなき時節
かなへしや仏佛るのわらぬ始る此つある粉霊もさら
書もあくまても酒の名のミにハあるを扨さての餅ハ銘か
いるとへ師走ハ年てゝ餅の世界なれてあけてもくれて
へうなされをよいろなれも詩人ハ酒のミ友よ／＼八仙
ニハ李杜ハ李白と餅の仙ならぬれしと名ハ入れ排諧
ミハ劉伯倫かつくめすけも茂炉真の餅とれるもとも
月排諧の趣向なおしも我門にハトヲもおとく／＼つてかん
様なるし

鬼佐

むかしハ茶の湯に餅しゝ舍利をめをたるめし料よろ天堂

寧人の頭よまりてなからくまかりしを鬼も十八のあて
むより楊貴妃の様子さへのひく渡辺綱とかる於は男に追われ
かくれ義の力も知らしや十郎姫まて引されて赤裸に
茨代よりみくたしめてはかなへ鬼に何あるとも生れたる
とや羅生門にて渡辺綱にくやまりたん朝比奈か家の座
まつありて一人迄かに歎しなるまてハさそうれ横なること
任の所為の精なる大黒なられの名何様なも痛はれ
しよ此ゆ身に力拔得しくなりて菱餅もさつらしろにて
芥川の合へなきれに鬼一口のあされ咎にむかし男を追せ
それのこなくれ渡辺康山の好色大江山の酒顛童子隠山まて
指茂なすなりしか沙汰なり没落も鬼の名こそ今は
世上相躁よなりけるまて神々のらんりつよく鏑矢の貢

なかにより出されつるは燕皇の追放にあふて姥女婆に
てらしをさうして冥途の出がけにあひきまうし佛の御
に発起せしも衣の似あはぬみまれつきるよしく是非なく
業の拝目となりひ谷の火のくるき加減をみて呵責の
あつかひの手に獄卒とよばれ地獄の六人にかゝりける
しかも痩られる天下をゆすりて万民泰平と飛ひ丹後
丹波の境にある梯かも松風さびしく安達京の深草
草花とうしてとかくかゝれて竹くて棟瓦に伏をとめ
大津絵にうつしまして下戸と思へきまき世とそまりぬ

附木辞

神佛の前を夜くうる中に上八りし是附木くこと
あり八十歳竟のをりしき世わたりの帝の出世のたね
之まて終焉せよとの前にしてわれ出こうして親しまれ
年くよりたゞは椀子もちられくあたえこにに明中く結を
くとかくや竹の唐帝の玉如き標して好て飯櫃に
まするのひさしも又は首むしるのお風子にあとひ退して
むさまくれからあかくてらつも胡ちの色をきふれ
万て手は手代共をありん、木代被滅のましきるに
されせまるの手姑の佛存の胡起に知家
乃ゆくらまてらしれたるもよりこまて八火燧に火を
おくてそ万をとう麻くうてもあれらしきれを用そうて
も麻よきはあられと二四五月の経穀に根か滅のまきく
は八胡麻とて又むしられ巫目のきあぬうかあられて

うつくしと美人草みる花に嵐のさそひくる　松叟

天明の孫なるむかの社頭なるに〻そゑるハ起てころもし
まさる〻へられいふもの垣衛うろの声いるらく車井の走り
おとし空の餌をみにあつまり鳴々と迷闇の情にハ人め
いとしからぬとき世界の声に狗つけかく雨戸一寸板の
あけされとも窓ハ四つ片すさみるてもくさしくされしたるこゝろハ
のらみ寒くる手水湯ハ名たりかくさるさきりく〻の真心
のきにあるも吹風しきれたれも叶ひしみゐる縁起しく一日因の
さうつゝく置株子先侯を盗きむより桃序に翁株
くらうそ嫁しあらめときふりて以験ユまとなら〻の母
すむをりつきハ人秋の扨もれなりて又綱起の画向き
いふしられ縁起の男と呼る人これを釈迦も形子も

たゆ〻し氣出る〻ゆきしのうや八一ト
蛍を扨てしく竹ある森の唯

炮烙賛

一世をつくりひるくもの日ふるしに宿くる炮烙もた工
あのハ圓好者のかくにたしまられとも其の性を論ずれ
ハすゝしくし諾冬ハ眷族もろく叶れく葉諾すと
号を以ハ張に香彫の絵模ふくり数寄の茶冬ハ天明
芦屋の作さくるもいは探遠よ下絵まあらえかるまれ
さすき石の古印二節もその〻ら氏族の草子むすり
あるあるへし炮烙ハ一錢もなく世にそつらなるくし
とうろハす盧全かあまる子茶をかるしくて雨衣のさな

彼先生の言凡かくしとする時ハ陳のやからの耳
を驚かすのミにてや其を為すは商人ハ程朱の説をきゝ
されとも常に有てしみ〳〵細に經緯を大切にきく
ますす中に役とられともやく〳〵いさゝかひたしきまて
る士形氏の氣質には何さるんなる〳〵へきハ其身乃
狂言に弱點と威勢をあらそひ又ハ歐陽公之文
より轉とらふるものを爲にめつる其を見て縄をとる所をと
いかなるものもあつてみけるききまさまかの
好ハ縣の碑狩人の系をとうし石川あたりつら答也
よ人論事れを罪ハ甚しく浮るへし其中に和田氏の
大旗より云ふ世中の名を物思るれとより今に老人の
筆をあらく書きまんかあま母よりいてゝられてかれハ
葉猪の上にたるをきくらんありける

ほろ〳〵や棚からかける秋の蓑

隅田川涼賦

あふ月のあつさのりふこうしにあつとられていさ隅田の
川風に扇や蚊やりも牛込ていつ來ます舟出して
まつ涼し出るて舟に若人の音なきよりつれて岸さ
きそとに舟ハおとより一葉れこゝしうるは波さ
も場とかは趣向るまゝ其の舟會に至るとまかるゝ世
あのもあれそと檣一つハいつめしく使きさくとり務く
の檣出て立ち烟の海つかまこ手を出れて風ふうてむかうの
神さむきにて吹つへるふ秋をもさしてこのあかとより立神の

するへし梲の東の塔日にさしかもくれめて常出きみ
岸の芝なく火氣をあらそふ市と今戸あり乃
み船もとまつるを解京竹をならしてそのうき多く
まうらへ出る家に四条の床をならふるより音に百艘の
あるそくいをつらねるハ誠に趣ある月夜も恥さるへし
舟としてもなく人として絶せさるなし言旅九
の金形のあそハ花火の光かみちると散し吉舟釜か江燈
の紅丹ハ樺焼のにほひ花よりも香し茶巾の肉の桑子
営戸やよまし船先の生酔ハ衛足らうにあそはし
伽羅茎物のかほりむせきあはく吸物つよふ振袖
焔臺のともしひけしとさうし大名の浜の屋かハ様
あたしありおり女中の居の声ハ以中うりかりし賢治

ありしこにとよむ大笑ひハいつまる興つきつあらんこそ
形伝のいきうかハ河の河原もなきさるあまり老人の暮
舎かは泥家のうみとそらつし役者の声ハ世くみまことす
うまかしそうふ卵子あてし田楽し瓜西瓜に三昧の
昔さ春るる声西南にりしつ流しく東北に漕あくる
風をとらく船路をとる船菓子あらぬ鐙なあくる
鼓子あり曲舞あり あるハみあかり深川さへうれ
あるは布の網の様よくまるおもしろなきく そのれる
よろしきかつるなきほとれつ中みても様殿字明
能うもあちきりさるへし浮世の情やうかれんふみ
打寄に漕よれく里にひろくあるへしさるまた
いうなるむ遊ひもおもてなしとあくへきにとかし

きさらぎの二つまさまに梅のかをりしくるすくらかあるを地せむ
もちろんみくらくれや琵琶の千疋兩にまさりあるなみくの
やかあるくるてひま白き松子帰へ八重ざくらしても尽ときま
うれしいつらわれ雲介てるうるきしみ漕きまえるく底の浅
のくまくよふ時の名残てもえへしてかへりっへよきま義
なれ

謝玄化去辞

こよひのあるし世に人くさに謝してまうれにいとくしく
招きらせて汁に園菜の鯉も料らせて四子法蔭か
終もかられ扱人は例の亭主にて次第に濁らして麗
に饒の花の名は知らぬ顔しも世の人香をはふて

されば翁の桃の葉にかまわぬさびしき山家まか
あるを肴は六十のタありとたのつれは百年に二月
の瓜とかられを自由にしても話すらんかたより我
の肉汁ありていとまみとなみみえひしろくもろ人に
俳諧に信ましまさはいさことしもおくみかへるにて下
かの杏寄の味噌とさらしたてのかすは風雅に楽とのの
他人むきをも歎せしりかと蕉葉社矢会せしとしらく
雨のタへまみれあしく瑞摺粉木はさらぬかもとまさ
をんのものまかすく我のの品状をかしむへし
さるも貧富は分けしかれ我をともかさへ招待にむかふ
膏粱珍味のきをひまへはしよき魚よき肴にて
すてものありしむましても茶ともくありうるも吾門

乃あるひすらはさこかしこちはらひせしゆへ今絶ては
紫僂里に植みして葉根喰ふ事ヶ年毎なたへしを
まの風雅の方人に志侍るなり

魚うりの聲まてにあけぼの山風

鍋蓋額賛

むさしみかりの旅店せし比あるしの店に求め出せる
鍋のありさまハ常やほしからむ小鍋の蓋なりけり
さん業ハ蓋らく釘の頭のこり同なる蓋りの形完あつて
いとおもしろけるさまのいさとなく昔のなりしさよ
れとさるは独坊主み佛体とや調しみ借金の
婆の姥とやみなんれむ是をとらせとまうしける
扨ハあくまて愛る人まもあまりて是うつすを今さら
ちゑと思ひし縁もあるしのいふにまかすしぬかゝる
世に捨鍋の蓋なれと額とまれハ蓋のとあかく
みハいつこより引はなれしにかすゝる是ハ絵やうらきせ
さる小児衣の名にえもうしとあハせて見し
まことに好く人かゝりてこれと架店の額とす
すゝめ

鍋の一雑知に落葉さそある
ちそけし昔とへとらてくれて
らを見られ鍋の世の中の
よし綴蓋の沙をあそこし

問菊辞

枯まてし菊ハそのつるに痩てそのつるにむかひきて
赤きハいくありく白きハいくきく菊なり今や世上
の富貴に加へつれく紫や色されせ人にあて
ら花ハ年々にあらさなれハ今年さと人にさとへ
似瑞とらへるのうき姿しの里にうられる旅
奥州ら附あ紅えく色にあらあく人にめてらし出あて
なる枕に起これさくひつれいしてさらとさらめハ
そろてし加へ出とてやハ西寄ハめくましむし
彭祖か盃にふあも八百余の齢をたもちし誠を
推すきらけも十万歳の歳をあひらし庶人ハこの菊を
さのみ見るれハこの功をうつやしらしそれ翁の
こそれやふかん茎よこたへつ羅にあとなむその肥るや
ちさりしきさるに痩るやうなしまようしきるも茶
見そくも汝かひまれよく衣うめてさうやけも秋風の
あらめあ花をそうなつかせる

我菊や人より山しれにも叩す

俳席之掟

一 飯ハ三石の掟なるへし

茶の花の比をなる茶も筆を記

一 汁一つ菜一つ酒の肴も一つに限るへし 鱠に精進乃
盛ものなるへし 夜ハ必茄 めし豆腐ハ三季の母
とするへし 香の物ハ論なきにしてけ

香も香もせめや五ミ齋の冬ノ銘

一 酒ハ器のお浸をえらく三盃をさへうしはさるらく
盃ハ此色を申ちへし

いかるに呼さひいふし 村しれ
其て飲子酒をきありて此ヶ家の挨ょなさき
なしむよんくろ茶の一句をえあた
狐さくおこらんとどめる云承收か飛

一 菓子ハ重白のあるに組をまつハお火豆子定むへし
お火豆子春こそさおせらく好了也共

一 煙ハ行灯おさるいろ並へし
蝋燭ハえんさい不有大事さ飛
有ミ案とりあよりうくちるへし 亭うに昇下の銘

なかねさまに癖器の接挨し古し此やくそくとさ
よありて玄味を求むる客あらは其の世俳とむすれ
く風雅に不信第一の人とゑへし

元文元年

招尋文ハしてあ笑あり 秋子有

茶人傳

天子信天翁なり地ハあそおらふさらふ才あれそ人
まし此おのこありての世たむしよりいひちされる
世中に祢さかてらくハなきとの改まりて此わりか起て来
とよある為乃これか語しといふなくして
きさりくて起くみる身れ氣楽さよ嫌てもあわりハ和せ世菜

とよりくるを行ひしの大ねハ犬きにけ出すおくろきく
おもきの蕉人とも出たるより世よハおまきハの蕉人とも
よふるのみなむされをけふくの幻ハその蕉人あって志り
きくして蕉人も志らにしてやよこるむ

森くや楽起てや安き言れ行

蕉辨

蕉翁の教の宗毎廿一年の妄を諫より一富士二鷹
乃不定とこそあれハ和歌のみくりしめて唐人の耳よハ
日本人の俳言なるこしされも蕉の瀉失をさらその
耶郎の枕ハあ有り古されそさらにいつれ妹よわりる
漆園にさふされ賤にひうまく棍國よあらよりしこき

雲北上人ハうち出の教の衣をうへしるしハ沼いしれ乃ゑ
ともさくむらしあるふくるきの詠あさかきらしれ足ハ
人そへぬ神くも古日満るまなけるくの枕上よハおそろえ
させのよそるかくる皆ふくときは蕉の告ぬ佛ハいくあれせ
例の世をさらあそして蕉幻泡影のさまへことより人ハ
野も蕉の語よ入て世中といふよもてしてうつるてされ
えても蕉野のおもしろのあらは蕉を野れくて〈万世〉
と起さくそのしこ被くくのしまて五十年の月日を
おくるも百年の算用ハあるへきさや畏秋よ積る
形し仏塔よまて形し聖人よ蕉形しとふいつ
世よ語り定めるを畏秋ハ出くよろこひ仏塔を
出て縁もろふ社も聖人まりハ何もさしめさん

さらハ冷にも熱にもなくてよろづでもよしよしの
鼻ならずて世にあるまじけれ

うつら衣 下

鼻箴

志のゝ浦の鼻ハかしより年をもてもつらね
いるもおもさのみ名やきこえにいまふみえし鼻を
以名みにもて俳諧にハとまりあらじ末摘花乃
つるはもあらしさ皆あふよみなし頭つけたのおかしさを
俳諧にいはれてしれさりとて腑の底のよそいやしむ
さらひのねよもあらんとて猿田彦の鼻ハ神代
一寸のひきさまで愛宕高雄の天狗達も自慢ハ
鼻にあるかれあるも杖の本みちられ家臣のときまさる
あそていつよ恋るも人をや人の忘中けしも貝ハ遠山乃

こゝろあれハ耳きハなる虫の声もしらしくワれハ文これの
歯も落て盛衰ものゝはかなりかなしきを備てしく
百年のつもり髪さへ鼻毛ハ白みもやゝしれつかれ
と用とくなるも形しひとり常盤の操をまもりて
財宝も山とつまれて孫もへりむされておそるへき人なむし
聖賢の教しへにも視聴言動の四のかなめをあけて
鼻に発露見ゆる色あるより世にほこりのきざし起りて
嫉にほこる妻女小姓のおもくハこと鼻の上けぶり
あらぬ侍にも鼻にあしらはるゝより慎てり
鼻つくあやまちも仕出せることあらんみにひの手
よほとなめいましめハ往にしく女のよわる髪節
みハ鼻の高き大象もつなかれあやうしの延せる鼻毛にハ
婬冷もつゝしみいましめ蕭墻より起るへきけれ
つゝしむへきハ鼻のさきなるへし

手の跡銘

それや此手の跡ハ名あるあしさよりおこりけれ
立あかりて嵐みつく楊の枝をとらし折増の梅の
引よえて清られと財にぬるき財の手あらひてあらは
谷の壁もなくてハ去らむさるに此亭ニおもせる跡そ
石なるや銅なるやかしハ陶なるや我さへに志らぬ
なハかくより方圓の跡に志たかひ跡ハさてあらしの
物ならはよるへしえてすや此手の四財さへ似しくたる
朝こそにかゝのなにあらはる理のこゝろにもおこるゝ中
まも風鏡のこゝろになに似てく世をさすまてなに似らく

時にあらくあるも汲く志らは一つにあきらかなるへきを
されい諸る人につきいへて年に此語を求らる我きく湯の
盤に銘しく日々に新なりといふの汚を濯ひさりて
人も日々に法々年とやましく此物ハ飯ひ汲の出るひ
うも常に柄杓を手にかりて志らく俳諧の折しこ
を志ら年いくこれに時く新の二字を語らせに切の盤の
銘にも徒さらく先ひもいつかたらぬらつ年のあるへし世に
よしある雨のもれこらありて塗泥の石ふ濁るともひら
此かの底清うなしふ纓を洗ひ耳をもきくとて志く
其君の矣をうむきくとも

級かへくすみ月あり年あ許

名徒利説

つく禄んと静かなる時汲望人のこころハ賢徒の姿を
あらて此物にハあるさ年ても志らくしもは一国の和氣あ
ることる魯れ扨あらし身に志徒さるとこれいふなり
名へみもいふへりくるましく傍る名の名屋かして六弁
あらりを入らくきけく名あく八仙の名あふハよるしくを
虎渓の林ふ足くハ志るをにたりあへし可を此物の法を
さる子牛将くも蒙子場をられたこれもふひといハ三
へうなあるふちうりよらひ間諸とらひ古須左右の
むつらしをありて弦子よろものの持をうけく実ハ
ものとけさるくもあるへきにさくし此物の口をそらら
さ身ゐるて名み孫る人の中に生くもいつれ・空

ともかくいれずともくともなき姿をもとむるにある
へし此めしこれは名を呼むことを求むるなりし此め
子獣が行ハ名ぬねあしともさてやなる一し此め
のこのおまありける一日もなくてハあるまさるへくしつりける
膝下にたまつきさりまでその此君れ名のたぬきを尋て
此章をよろしみらくみへきされて世の近侍の意ハ
立居ふ席のうろきくとなりもれども此章の奉公揺ハ
さらつまてもいつまても年の根つよく席の意を含む
まそ主人のむねハ叶ふするへなれ
月に晝ず忘ず徳利の四方面

楽忘記

雛助堂にめでまさ徳利ありかくよりその名を此
章を呼くあけられの要なるかりしよこそしまで
一つを求出て楽忘と名づけしなをもなるとされた昔
男ありけり井筒の女の庭立かくかさらばなる浅り
なる安のこおりにけりかようふ不便手にたるハ公の為
のうつろひくまそまていりかあるしひすなむみやし
これハそのさくひふハあって主人の後のそりうまきふ
此うろひもおらの青柳にうつくさてこれをかそてれ
をさらけかれとおもてこれがよろけとあされを棚母
東旅の筆もなく此章を月をむかへてハ此楽忘母
月とてしむ肴核ちてて狼藉して新炊の中
まてむ比此章ハ膝を祢とろへて楽忘ハ捻とてけて

三人の翁の笑ひをその柳も秋なりとさそハ
おもしろき四睡の図なるへし

旅賦

夏ハ麻ぶけの袷うすく浴衣染の花やかなるハ京家
乃おや者か友ハさみされのかきされて金谷島田に大和
の市をなし秋ハ木曽路の木々も紅葉して猿之声の
涙ひとり行脚の頭陀をうるほし又ハ袷鹿のなき
小飛柳の足を定かねるられもよろくの哀なるへし
五十三次の駅々ハあまたの人のいひふるせる事多くハ
宗祇の連歌師の世ありふるされ中山に旅行の詞
をつけ宇津の山室の草庵まうりて十團子の事也

トハいはれさる行を寺社仏語の由来書をのり方角
の詮義に落て誹諧師はひらかへきさまのハのてわかり
許六か賦するこの境界を見し木曽か説に出女
乃兵衛か哀を述てよ書かなくてそのまねひせんとならハあまりを
例の枝なくよそなれをあらかし旅の哀をいへとて
西行の笠あわけ宗祇の草鞋の紐をとさへと大事
詮無ことハさく煙草盆れ銀をもつハかやけと竟白
のかるる能に足とられ縄子の衣足にあまりをきくも
旅なくにしてふいとてハいふてや本陣のうられハそて袖
小幕をひるこしもてさる馬の泊りをあつへ亭主より
盤ハそのけるる上下に泥足くと立きて途甚も
小綱のさをいひけるハさしたる草枕といふひとさるへし

下宿の女ハ引わけりくるんを先きに居風呂わきかり
小らうきハ行灯の信より出しつく袖をふりのハ末ちらくる
風をつふしまさと袖ゐ者ハ名之残の勘定子のくしほ
人よふ手拍子のなうめくてこうにまひしられ月わち
馬いろうき草鞋うり焼酎うりあんまゑんひきの声も
おさまりく後拍子ま下ゝとして立れらハいろめしき旅の
一体なりさへく縫絵屋の庭の気色ハ藕鉄わくり松
を植ぬハなし畑峠よハ山みつをさらけ大磯小田原六
小石をまきちらし坂より道のひさしハありふれく太戸乃
名所ハひつみくさられ湯屋ハ女性よひろくて豆
箱を送りし雲紀の塞ハ孫番よりつゝうりて浅身
乃裏梅もあるぬ匂ひ子飯迎より蛍の味下ゝと義

名物膳まハいかさの鉢ぐに子鰈のやきゆ大根菜乃
あえ物豆皿の豆腐よきさみ昆布の味も定まるく
箸のあちこちいくぬもくてさんとりやいとうさし
出女を赤まへされとハみやこよちらき名のとなるべし
宵ハ近辺の所ゟるまに吉原の奥谷よ西戸ちしらそ
もこちひとつるさかやきの稽をうけるちまりかとそ
申しられ當草鞋は豆の皮甲ハ申しさとの居すへほ
あやしのちぬれなみハ竹につけく道をさうまし出ちり
赤表紙の名中記わかりよ鉄砲をさけ樋の石さ餅よハ
きく来る雑巾を裏よ菜根の赤辣ハ巻らくみさし
枝沢の飴鰊ハ建よるけく新よつゐもされく日よりハ
天気よいろなるらしも大井川ハ揉まれけまこうして出女

酒匂に二日留られけるあひだ宿の茶屋よりさかなとて見せける
しまし日ハ粟の粒をまぜあつめてひしける小判なり
ひらの焼餅をいだせしに其のちハ銷売にきたりければ
大濱に温飩をうるもあれバ此めしを乞ひ介抱して
天龍の川風にあたりしに笠をとられける宮楽見しに
まかりなりて幸と不幸ハ首途の吉日にもよるなり
なるべし旅に衣をきるものハ其の行衣の此の一つのかゝり
あるにかゝる人ハとく人の遠寄をもやわらぐもかゝるべく
人ハかゝる人の銭をうけとりむ小揚のあひて正ハいつの世
よりの酒落ならんやといへバ二十八文にて其の
坂本にハ二十八文なるべし舟ハ旅籠の早追ひなりしと
旅人ハ桃燈の女中をゆりつく男ハ定まる駒を雲助の
ゆくまもなくかなしく鹿島のつの川越の首（水嚢）
に翌奴のまさりて及ばぬ富士をみて見るも片目の
なりしの産当の世へ向かふ峠こえしられ世の中
のなりしかなかりけれ中にも口のうるさき船頭ハ大坂者
なりとぞ名元の旅する餅屋ハ六十六部にさくらの前なれ
な諺に一生涯のありさま歎きまして旅なりしと
世に旅の宿にまよひて見るかのの信たる人のことにある
まさしくもいかにしみも行先に見れたしみてとし女房
の六尺の腕情よくてもなをまされるべしとて俳諧師の
なる果のまこと葉の見入るものなかりしもまさに名のうへ
あまた見めて古世和泉の素を申しに松濤家澤乃
涼よりおもふに近文殊まりて庵りなりにもなれ余人

かくてはつし毋も出さぬ気なる哉雨にもぬれ月
にも見のかをつりちらしきのこの山かけに一とせ
ある家の情をうけてむかき折々囲炉裏にさそり
孫さうあはれなる虫歯やむ子にまじなひなど稗
団子のもてなしみあはあるは志るへの古寺をたつねて
和尚ハ漢和も志らずして茶のたはける碁盤よりすく
きみなる六日の名残をしまずして松茸に吟じあきたる
春と及く雲万里をうれあるときて行しあきに月乃
やよやなかぞこの下人を孫平といふ我伯母の名
なるものをと好く故々の志しき折もある一しよ山
仕度十年の身なる様東海道のみかにみやこの方
三ツ程千里千里なり粒ありへてんはかりの猿ひき
志かれてむかしハ齢も四千の老ちかく志まりに桜田威
慨の情に君のみて猿の紙一葉をとて寓居の手
をつおやもまことくふあちきなきをいふる一丁

借物の辨

久かたの月さへ日の光をかりて照まして月乃
光をかりてつゝぬすみとがめもなくちるなりむかし何某
のみことのみかとれつりをとりあはしよりまして
人代に及んて一切の身をと借るに借りてあをしらひ
それと紙の挨拶のといへるさくらひハ借りてさらひに脊
ひきく鉢ふつハかりられて瘦てかるなてあり出
それ今根なりハ徳つきて戻出をかとかるなの

なげきてみハあゝあさましとかへりて其の身のなげきより今ハ借る事
さまざまやそらさすむかしハ男ありて女住もみやこの京
春日の里にしれる人ありてかりにいにけるよりやごとなき
雲の上人もかりにしのびやハまたハ来まさんと寄せ草の
かり入しのべそ罷のやどりなるその女も宿れ月はちよりハ
地蔵説しく人よりも世のかりそめハ屋羽からほして
春来てもこの地にかへりしばかりの宿りにむとむすと人
とゞまりいまむる生涯迷も借りてハ現世のこゝろなき
すや二乗の甚不りハ掛との彦生来りて人の衣の表
これが為にわりみのくらき文ある寺にハ道徳の知識ありて
この身ハこゝろから借しつけてきまりの算用滞りは負
なる櫃方を呵責しのぞみれもこれもよ〳〵に倩の成ん〳〵

またハしかるむよりて此れ申すものも親子ハ酒碁ありく
いろきれあし数学酒に負れ楽ども打ちまそやさる
を今の世れ人ハ借金を形にしてしかも昔にあれそ借
さしも百までいきぬる身を持てこのよハむとかきしまむや
いよさぬるかやみの世そを放言に挨拶しきりて我ハ負
に安んしさりなと思ひし負楽の刃こそしにいかハやるせ
なきものゝならぬ雲と事くハ雲かの易返すりた
く世にある人の衣服調度をもしせて人ありとわりねを恥
うしとてもよのなかに四季をうつし世上の恥ハつゝしらるゝ紀
と人の物をかりてかへさぬを恥といハさるハさて低等の
あるむかしく説なそ口かしとを恥ずかしとてつゝにハ
恥さるにあるしらくいへる我も借りあみていかりしかぞ人

くふあらは詮なしとてかりのうき世に金銀をもたいずな
及ぼれたり賤しき者も猪も泥まみれて女房あらば
かりひきみなから世のおきてとしてたからにまかれ
うる人のまにまにちらかる金銀花

訪剃髪辞

みな剃髪しく桐の坊とよりまそまつハ鉢勝の法
師ハ名をときくようやくにて付の披をならされ
とも汁徳ハきららやきあくや飯汁ハ子をやんくハしも
さらりハいまさくきりんとて
襟垢の世をとめつき捨て紙衣なれ

猫自画賛

此小菊の白くてきらくしきに出つきてえんとせ二
くあるふさらに行くへしも覚つまさされと梓してか
まうきうましきることをやくちりてなしさらハ母狮う
嵐のあれなましむひまひをおこるましくまかりく
なさるハ行そ我ハ猫なりとさへても大きくハしいかに
おりし今図ゝ書ける萩の戸の馬ハよろしく萩を啼達
ふたまつかしいさる能画のことしく四条のそこみ清水
かる花見をなくふきらてしきい絵の屏風襖をもあつてなるに
の人の方こゝに出く枝拵を方も浮きさらかる一し
家ゝ袋戸の猫ハむらくたちけく手くせふかくも赤る
のこひの踊もよあれまして肴のいてんさっしもさて

まくしの為ハ中〻くやうきうさいふなむと絵月有よ
うれぬのみそ玉の色の庭なしとやうしられぬへき
世ならさなきゝての虎をゑかきてハ必猫なりとうけり
みてもられ又猫をうつさは虎にも似るへきを杉子まで
ちいさく耳うきみハ大ヰなりとうの粋の事みむし世ある
かくいてそ鼠の為にてもよしなしるのに似られもいる
鼠なしも白きの質益ありて子孕の白鼠ハあうしも汁
かくむねしられをうしろ気ちてさんめるよしむる
愚の口る鼠のこゝにさうも氣つよへきハ荒武者の名残
の毅さくありとみるらしいきてかいそれよりも近る
一しきうは牡丹花下にて子そねるともより八比棚に
ねうりくかの子鼠とり耳しむへしうれなきもの

一旬よつゝく

申ゝへ比歌鼠の名にも六日より

戀説

加ハ申れ子も縁ハさもまし心ゆハ夜なく女にも有れを
かを迷ふさのし舟もし取もさけくあうし心ハいりき
科もてもいさあらやハあらむさてしも世は言ゝへあふさむ
うく夕ゝして人のいまし むへられその句くハ尋るけ
くそ世の哀もある結あるへきをみるハかしまりあつそ
みて荻の上葉にうぬきうみる明の月に別世
さゝろより沖のなに浅をみけ博士のむく火にせむを
うちへて光もく雲う除くる月の山も涙なる流る呼の

談じてふたみ詞にてハかぎれとも逢ふての別れの恨みをも
うらみうときこ一筋の情のことわりく女の男をしたふ
やさしむ男の女をしたふやさしさ姿にて変の恋ハあはれなる
俳諧ハ万像にわたりけれバ老若貴賤をとらへより姿母
自由の働あれバ井筒のかりようのうわひ子の手鞠からにも
さる情ひとつれを源氏物語のすさび袖にも紅裏にも名をさせ
逢ふての待ちのこと詞にハかくれたる句の姿に恋をとらみ
されバ恋を一句く捨るのおこと此つのみひの遣手に
こてあるんあかれとかの法師の手をもうけるおとこ男女
の情ハ獣の生婦に立寄りひさる中をのこいふおふハ逢ふ
ようりし嫉ごくひむかしき京毎をとこてら老廊下にまも
あらし向ひの女房を涼み茶屋の宿にしる思ひまて

見このむかしいとあこがれにみやこのおもむくへき不しも遊里
の軒をきしをもとめしとて秋の関守ありけり其花に
詠のつまにさてや其来ハ相手の情あり遊びもつの主
も西よりきむき安くちとひのすりし夜ハ面白くくるつ
にありし昨ハおかしくうちく謀まくく其根ハ性に憂け
とより人のいふおちせめとしてもゆるこの方よりみ下し
若いお留守みる夏のうき情種あくしととくして奢る女
あまえしうとむや秋風肉汁に吹かけり出口の柳あ
是日かけ驚卵より丹波口の茶屋もしみ妻しく男を
うりこる嶋の浦あてにもうしろたる備金寮てあまた
今出川の宗も階に流れ出し嫁か小袖れ妹鐘へのりより
求くもをあき目の境よありてつゝ二三年の後最後

とさあてさて手並みハ水の泡となりけるぞ昔
の名手も今の伯父坊も見えハこの子なりし我身
ちかりのよられ末辻鳴川の曙なるらしちりきやうる也
とてもおもひし心風ハゆきかよひと待ちかくまかる侍、
姿をも香をもなる人やとらへんとして江戸さかへの花
なに人のひのまへとも つらく与兵衛が身に花かかりより
箕の輪の雨の名にぬれてちよみお客がむ戸ならかる
より今戸の舟のこかれなる身にて遊ひに巾の底なき安き
ハさしもむさしの世の中にかよふ人もおほかりし波よりき
られも恋に身をかくし辻君白人比丘尼形の所知る
をれるて真よかのハさらうなりし赤坂の百々女さく
おしうるぬるもあるひとく恨みけるに事狼人
かいこのみよきくるしひさしき縁恵ことかしぬき
ちまつしみし娘来もなれど一夜の契の蔵をなき
いさ比丘の身となりぬるぬく、されよりの世のさかへもれ書
なりのところき中にお比丘尼のうきみそける修行なきみ
の業をさる出るも名のり形の色をもかまへて縫ひ
話をよくまするもころみし浮の身つりあれとおもひき
あさき世なりしあれてうき名ハ手引にて安きを限とて
身の病には夜つりきり野を越むとせし小角立つも坂に儀
のかけそのたくみにワしし蟻穴のあやまりもふまふ
身をたつけも端しもあるもしやされと杜是非根をれ手
代ハたかぬめ出世良名へ稲荷の前に女房をひろひて
四条河原へまする子の大名に抱へられ新まて仲さら

なる扶桑をさして長きるの根こりてあらひとくに我る
の光をうけし一の念仏讃中にも妙なるさま詩に
のこゑへしられて一生の鈍根なれと其法にくてうりなお
拾京の宗の雲にもしまさるもりに面白なるを
住しありて至要なる所をえらみ入をわすらひ坐の
指南の桂枝の月にも救ふる出入とあらさるなり
あらはおのつからまとはしく此往来写ても紙の上
癖にわたる計立の沼をもわかれの外にとく
表八句よりつゝくれはなるをくへし文は風俗にいたる
のとらひもありて律儀なる漢帝は反魂香をたきて
よろこふ夫人の面影をうつしは宗祇の浪花に比喩
丸をつけて李村に短慮の器量をとらむ猫にひかれて

気をかしくアはまかれのへふしてをとるち蛍よるなれと
詩るひし叔は古今集のうらみあらそなしおのつく
貴賤のけらめうきとも云へる身文法和尚の古語
る京も破戒の罪のかしこまりもなくれたまひ方よ京にしてき
ふはあらぬ京にもの定むるなりとは和句に対して
熱向はありても句作もなにもえてつきなくとそて
その屋はくは奥のさまはまたよむと橋しまりて候南貞写
かしみあるへしいてや京てらひ猿しいよ流は良き
と云しく猿は強なるへく京は信を先として名は
姿よあらさるては内外はさもらしく後のこころいはみあらむ
さらは句案の上にも京もあつゝあるへし
しる談は読者の罪ならへくしてしく只後の見るをとも許

つきと見つゝわたりてにしくゝまりけるこれもまま
ちの間に迷ふなるらむかし

閑居記

ゆるかし山一室ハわつかに世のちりをさけたるよ
峰西の間にありして我る祖母のいまそかりし今ハ四十年
の昔なりむかしの人おりよろしくありて称山軒となつけし
庵の窓を穿しそれもやゝ年ありてのち母にあらそ
のかゝりたるとそいとゆかしみつゝひつしてちかく入れ
定省ニ寒暄をとふ訓しハ十とせあまりにてせなんと
ゆ代かとおもしろのかひもなくむなしく風雲のよそ
しるを抱き桃李おりとも昔とハかりかなしれとなつて
思ひ見て今宵郎身宿北あはれたまるを増ましたゝ引移し
私なるになや伏見の里なりとかなり乗て雲を庵外の
一下なるなりせるうへハ訓来つるを半枝も我を忘れしに
我ハ涕して訓こしてそのひとつしかしく風樹の思ひ
家子家るえへハ其格のあちの笑をふくむ新子ノ身
なる晴ハ窮なり盥漱の躬を告て孝情の思ひをさるを
しかのを惜むされと一室ハ外の南を譲て庵に
押込こもりみしかの名こそひとみに不子之意に乃
そくありける不友ハあけてして風を通ハ便あり
中ハまして冬こもりによろし夜具掛をしなりし火
とろけて読書静座のつれつれにその家子子献
行あり燈をもし杖をもちる其の新子弘余ハ

枕の声その一ふしは耳なれたりとも是らず沓の
には潤ひの西瓜ありて實るの若葉つみとこそよべ
韮も鉢植にさへしられ茄子ハ初より世に
久しくてあふられのあつものにハおぼつかなしと
や午房ハそれくしも大根にハまさるとも隠
て芋ハ地にうもれてこそよきものなり
實入のうしろさきをもせみの小川の泉なるとも月
も此おとひとつにこそ千ハあらむ十の遍路のさはり
一日の閑にものいひしたつれぞ流世の位よきをもる
おもふ人のいとてもあはれに田舎女子の
京にかへりて都へなるゝあさましきまゝに歎に念
の二ゝめなるしても二文の銭をもはらさるゝ
我なうしろをてまつり

断酒辞

かくばかり李杜か酒猖もおのれく上戸の国にハ下戸
まうとハいへども下戸なる人にハ鳥もいられぬ酒に
剛猿の戒をまもりておのづからの人のうたにきく
られて南郭が箏をひきならせども四十の年
まちかくされど庇人は酒臭しと世に異
するむハきらハれましてゑ十にして淋しとかくしとや加
こきいろあらひも似ておきなはいと身まて酒の
あまりなる中にも薬に虫ともひくをありて
試に一月の飲をたちてはかくはかしのあるにあり

て花のあしたの月の夕かくてもあはれなるものを
ちらしめて萩のさかしらなるなかなり春の蝶
の酔心をさそはれ秋のよみらも茶のたしなみもち
下戸の楽み老を待へしさもあれは飯をひみさかし
川の桜もせめもしうへ八仙の一夜なりとも花を
揃の衣服に容り吸物されは人よりもあたらしく
行すし酔郷にあそふへくはいさ行の俤の山にこそ
居かはかのうれ仲間となりし
花あらは花の名たちせん下戸かり

物忘為傳

忘れ草生ふる所なしのあたらすひとらる物忘れ
しらぬありさまは健忘とていふ病の名なはあらて忘
れのおろかに生れつきて物覚のおろかなるものにてよ
る昔は儒学の道をもたひきて唯文和文の序まて
書なれあれもましらひあれときくなる程の
のもあたり面白しとも思ふる夕への定めしらぬ
き事は日より三きれ其の頃なくて君すもむかし
のことなきくおしされくしるとき思ひとりかへ
行方もし根にふれを書の日は又あさるゝかうれえる
秋の夜は虫なきこゝろを行すしかくてそ老あり
苔のよりそあの人のやくもくも小指を結ひまね
ひらにきすてもわ水の数くなちさく人もはらひて
も罪ゆるしつへしされそなの翁のいへりさかり

ようなきことゝ手本をきにかゝ侍へられしものゝ
人やりならぬはしるらし侍べからずの為たまへ
ば唐高の語にふとうかさるこそれ事なきやうもある
あるひはきくところ業のこころうしめ時々ゐるもの
身たのこゝ将て世に拔きてしと心味ありてまさる
の例の大坂陣をしるさき人をいつきさらいにく小役
まさんゝ中にも我は仍りし傍然の所よりきにおよびそ
きこゆるとおほへらしけるをきくからいある為
をさむかゝる人はむかしてもおよそへしましてこゝ
くる訓をそし文書物からの名とも書付
そしていこへし宣へし書きみしせば我ぞとく
しく又もかうりてしる時は足あしくさするをまゝむかし

ならしくあられ先はいはゞ西にわれくとつゝ其三帙
の書籍ありてものあしくさきに見るまでし
也しに宗天子役をさらしかるものこゝは人なも多りし
物ともしれてとりまゐりしいひたりしきにかゝりし
おしれむかしるんなは中にしれし記物をすれさるゝ
そいひうる花ゝの為ゝ末の集に何の和歌をそえてぞ
りうふしむ

ますれてはうちあけゝくゝ人へさすと
病宮てし よみ人ハよみしか

妖物論

世たまみ物とりふ物ありて おそろしくハ女ともすり候と

あらわれ大坂夏の元和治はまけとさらやきなりける
いつはりをもすおそろしき出るといふする事へそこに
武人の聞ちる事ハ御の子係のいろくてもつけりさ
をし答をるてもさしあたりての名言あるへき後の世
とおもふにいれても今の世にも出来ぬしく武功の人
に生あハとれくともの外のあやまちとりかゝる異名
伯母に化くかのきつねといへし狐ハ叔父にてはけく
四民の文九をといふ禅子男か伯母事にあり狐か伯母に
化さんハその姿わらしこう出ても正風自在のな
姿なるへきともまつハ狐狸のまとらまし落く猫もる
河童いろくの化けされともその正体の穿鑿ハ此書
のならぬものならなりて理屈のさたみ申しにて

あのこうにまりしれもちり神ハ濁をまきうせ
めい仏ハ称名に来迎あるをけかみ物ハ百物語り
感応しく行きる時わる姿あらわれも三十国会す
のものれ訓蒙図彙の手まも及ぶれして赤本草紙
の小双紙にもうつし出姿ハしらぬかるさうしに昔今の
美婦国名するの絵ハうるしく実やうにおちわれ
狩場にさ毎なひ又ハ猿沢の池の藻屑にまよふ逢
尽く巣か家をおもふにきらされく果ハ東坡が九相の
そてはうるさくよしてこの世の終をなり引幕乃
佳としもとの手すあらしに箪中新中もいらすすうきさ
けもやしに失まりるまでいふまりあく
はてしられ

右の文章享保の初より寛保比
まて半掃菴芳述の遺稿也

張藩　六林校

題鶉衣後

や有翁ハ風雅乃隠君子なりき予に莫逆の
交を許されつ孫に数をとうらは半あらし
家にまゐる東都の四方先生ありて予みる
その著名を慕ふこと久しはるけくも云ふ
翁お壮より老にいたるまて生涯四時の不断無
ありき草筆におさめかくし置むきは人には
あらはせさりしを東都の先生いふして
せつからせ名ある人にこはれてその也今
梓ともなし翁の序なと翁生前の依慕無

あらさ並ともこゝろ流石の音ある人また外に
やはありし蕉翁の旧庵へくみしてをなす者
文樵なる男余さひなる徤ともまて押いれ乃
引出しをさらし文匣の底にふるひてあまさの
中にちり埃のつもるを払ひこれと撰出し季
これを題して日なみすしく精に上せ達遠
近のぬし一年に一誓て言葉をよやしの流あり
誹子弟子旅く濁世に知音をしたひ一月膝をな
糸下みし花蹊して歎恚あるむをも四方先生
乃言語ハ海内にしれたる所なれ梨やあたるのこと

さまゝ発句集のはしにつらねあきらかにとゞむ
あれたりくしく山家に贅せんと四方先生
此一挙と喜ひて賦しし聊かみあらかしを附
するのみ
天明五年乙巳卯月の下旬

蘐花閣　六林識

煙草説

我居の猿み稼まきして腰に茶瓶も提げ来て秋の康堂の淋しきとて棚の餅あもあれはをて只この烟草れあとまみりて琴詩酒の三つにあまるへり気喫の其え杭をさくしいるは宰予が画の目さましとて行燈に首延しるは小侍従が待宵あるむ達磨は九年の壁にむかひて炭團の寶を悟り西行は柳陰有をぞし火打の光を楽むされを出女のきせるは夕暮乃柱にかられて口紅元さしと吸ふるおは色つくいさんを形氏の縫きせるは舳さ紅子甪窗くを明乃

月を詠ミたる大法く吸ひて扱ふるよいろよものなれ
やうちにむかへてまさき唐家ニ緞子張の煙草盆を
あつらへ数ニ引かへし　さるより路次れ洗へ合ニ吸口包
さるハうくくる風流あれとさしたる辞義合ふよろし
又へし只ありかしの松陰ニかゝるたくひ続きせるときハ
せは茶釜の喰のさし出しく蛇々ニ蘆火もあかく
さし出しより一瓢千金れさへ此時といふやまさハ
雲在みく立のしるニ路先の塵場といふ所かる烟草の
きせるにくん着さしあつまて吸ゆる気して漂
母々飯の嬉しう語しさハまさゝあるも煙草の徳
もむかしより人の云へる古しく今もいふへくも無

ものの変遷するにしたかひて出来の不定せし事ハ酒ハ
富貴なる者あり茶ハ隠逸なる者なりといへるこゝハさし
つれ君子の書にあくうして用るかハ一家に害を起し
あるハ時ハ神わうらに隠るこの耽溺の依あり
いへし下戸と嫌ふものハ世に多かれて下戸ハ枉おらす
今や稀なるハ多かるさまといふへしかれとも吸口ニ
も吸つきすきこ入の風流男ニさへにきせるみもおもき
としくよあるへしして煙草み目を迷せしも楠々金剛
山の要害といふへくせつりくさて不まるあるをさとし
きせるハよくと通り灰吹ハころさぬを実上とこそきハ
あくゝうつゝ心の人かゝる異意なるもの本性
実彼をうしなハさるして有と

薦册記

つのくにやいせみ薦册とある山あいで湯(温泉)あり年ごと
になやめる病者こゝにきてさらにいはひハ七月の
頃あまり屋島と舟出しく来名にしたるあをみ川
なつかしきをたゝねきくの山へむかふ

昨くは夕へいつもあをみ川

この末ハ人の家も多くに蕎ハ古のけと酒家もあり。
咲ハ萩の花の名のしく秋草みやさしく咲きみれ
なるこゝを絵册といふなるよし

詠みて扇の絵册に花つくし

山里にいふ一つ家ありて菓子すてうる亭に亮みて
こゝよりの外濃なき俗人

それよりハ岩しきを経くあやしき山石をつたひ谷をく
たどりて雲より雲をわけ入りて世の外遠くへだゝる
心地しきさてハ志つかに山の中なれどそこもやうにはハ
景もやう湯本の家ハらつ二十にあまりて二階つくり
打ち続きにく古市などいへるあたりよりきたれ
女あまた来りたるく糸竹の姿とあくさきまれも小さな浄
瑠璃山のとよむまで峯の松風も三線の音とさそふ出湯
谷水も脂水の流れに濁らへきとぞうし外の山里には
なる今年ハことに湯入の多くていつれ湯けむりよみつく
なきしく手きれにとく出でりと外の人もいふあり
ゆくしきいるいなみもとまてにあつて山里の秋の夕
ぐとなねさらひしるな地となるかも知らてしてまとも取

さすかに出しおもしろし　忍ふの家の名を
橘屋といへるに遊しのやとりをもとめて西より襖一重
へたてゝこゝにあれハしく謡ひさふらふ
よるはれなから憐や山かつ

四日の日 雨

湯の山やみしきに染る深ゆふき

薬師ハ湯にゆつりて秋の拝ミ哉

山の上に薬師堂あり 三岳寺と名のみことくしく
因縁ありける後ハあらたにいとなみても絶る僧坊
旧名にてつくハ堂守に男あるく法師にハあらすなり

鐘つきや剃らぬあたまに鬱柳

六日あまりの月山のはにかゝりて風も涼しありけの影ろ
しほもよりの端みの夕アありきに鹿の声近く聞ゆ
つるめ

笛ならぬ湯の駅にもなく鹿の声

つれつれくおもふことちなき旅ハそこらみありくに結ふ大工と
名つけたるあり

交床しく猪と月こそ夜まれ上

其流といへるうしろの山をへたてゝ西より落る

其流や松に音きく秋あらし

この山にはあやしき狐火あり人の玉還とかいへる

玉還をわたるもあかて秋の風

我名はつみ人の名もしらねとそのつきくうくあれかの
りいかなしくいさゝめへハ二花火あかくちかくさきまほ

あまごといへる魚とりてあるとさる人くれなるは牛に
のせに明られし元樹といへる若き僧あり
下手なる気鋭なとさしてまきまくさうきとも
あれけるる日数も二四日ありつれてつる日は雨に
ふりけく

湯にぬれし秋の果や秋の雨

こよりのまでも樓のさくは生れなれと云つけ侍る此は乙森
年にあんまる

樂老庵主像賛

淡泊の屑とあるは酒におもむへしくらいは茶に替へ
しと二つの月にあつくさむは楽老庵のあるじなりこれ
をゑらむましに賛しつく

酒に侍茶に侍りつく月二秋

といへるは今の友紫陽里の某かもとに遊びしとき也

諸奥州株人辞 来我の来由こ詳く株人雅伯に御あつ辞に代よ

世に八芦垣のまちかき折をあらくくさらにあてぬるかく
まつ里もせぬなからひなるを遠き陸奥のみちもおもむ
かるより一句を添てこの地の産なるよしさしやるなる
硯を贈りありぬあやし其の文字に托されなるん我
あさくに人くるゝとやその便せし風雅をとて
その家に名さる騒客島庵主の何ししとや此の翁の
さい庵にいるなる庵に我名かゝしかへるより亦は俳門

乃友なりとて寄せおくりこされて我及ばぬ此序
むかしより蕉門の人としきけど皆十年の舊相知の
ごとくなるかきくは我なくてもなるむかしのみならんにや
なつかしき猶のいふをあしたしく稀ハ袖にくだきたなりけり
あるは遠き国の老翁をたえて此子の名の聞地をすれ

さらしなき所に己己や老

いてやこのあきけのうきけつましくハ松の烟の是なるかなり
ところを文台の朱硯にハ定めぬ世をもてうつす寿にも
なかく風雅のちぎりもかハされとて

朱硯にまつ濃き心哀れ也る

さきや芭蕉翁ハ生涯を雲るに旅立杖とどめさる
おもきなきころ中に奥羽ハ行脚のしるしあって奥の
細道の紀行をあらはし給の句ハ人の耳口に残りて
ことにまし きつまくも多しさるを仕方にそれされ
て旅爲の紀行やまさしも此くらんと欲する紀ハ
やかもうけて一夜のみちも及ばぬなきに千賀の
うらみハ千爲の紀も数あるにそびろの後も浅からむされて
雄国の一首をとらへ一句ハその人にゆづりさとを
告るなし

ちる川や芦にこぼる枝も秋の風

一色亭記

豆州熱海の寓居の因 渡会氏其名つけて
泉ノ求めによりて記す

浴に浴し詠しくみつむとなかひし此生の宿にハあまで
秋もちかき入の湯ありきる此比あさゆきれ湯本に一月あまり

のやとりなるをあはれさるに我か老の母なにたのむ
まいらせて身のなやみある孫娘ありて舊痾なる事の折
をりく疝氣の腰を温泉に浴し浮世の耳を洞のに
洗はされて此里の地理をしりて山のこゝろ海のいかはかり
波こゝろにまかせく月の夜すかに枕を支ふへく鹿の
妻こひ巴峡の猿にまさり雨のつれくに盃をとられて鮭の
味ひ松江の鱸に恥さて伊豆の韮山まなこの緒の深久奈
の日の山ゆかりの紀僧正の家眺く魂をおくに
安しく旧迹をさかしめ沖の小島は朝夕にみなれてもあはれ
大島はやく波路へたゝり雲晴くあらはれ壽ならて
ふりかるもみな壽ちきるのとえるかのうちにえかゝぬ眺
望はなるへうちにまされてなかんに東面をひらき湯入の
茶の間をとなりこゝろの中に後よし氏某か亭をなせし
くらつよき樓はさるのむり佐文山にてよ来らるついて
三字の額をあたらしもとのちしより一色直亭の名によるは
滕王閣の趣なりとや落霞孤鶩と齊しく飛ひその
長天と共なる海つらの秋もをかしく浦のみなる軒端
にさかりたるなくんあるあまの庭のたゝしと荒しても
よみなむのはるかかりて家居もころにつきくしられも
ちかよる人もこゝろをせる先やすりとろのみてまる

心ありて荒きぬ軒に浦の月

之會画賛

かくより小町か身の果にもあはれ謙讓忠の誠し

こまあらば老らくをも忘れなんとかくハ厨に肥肉を遠ざけて
仁政能く民の寒暑に及ぼすべし臣よくこれを忘れざれバ
下々飽満の恩澤を省て報國の志もいやましてかくつまり起る
さるむかし治世ハ明らかなれバいましもこれをえがれどあまた
ある八花に一盃の酒ハ忘るやかなく雲に飯汁の余香
やむべきともあらわれ世の人心解せの国のうへにのみ
つきて猿のまね及びあらたにのぶしらんとあり佛を
香華にまゐらせくその黄金の肌を美しむよりハ、
よしこれを起居に詠じく薦一枚を忘れざらむ者
とそうらゝ世の為に画賛して

十六夜賦

いざよひの月さむと勢田潟に舟よそひさせたるに頻りにし
あらしおろしけしく世をすぐしたるもとありし臣に
細鱗もまろらで心ひるがへりつきて斗酒ハもしまよひ坡翁
が妻の未だもうれ波おきたる闇も漕たひかれゝ舟
あまき月の波つゞにのぼりて二つうひや星崎のよるも
月みずハ帰らんいひてや甚だしく浮れに至る乃
みけとめて成秀が門敲あかしともかくもしかくこの山
しそちらが呼續の濱松風の里波のみなもまよひ
ちらり西湖江湖の秋風も今宵ハこゝろ吹きさむや
湯に分きらし茶にさらしてや清興をそゝるべき
まして竪田湾夜の寒も見る名にあふよむ人ハ
かるしき物をとひかれるとい、や月こうんみやくの

寂しみこそ例のからしのひゞきに出たるかな
扶をめぐらし又一盃とあこがれ出て白鳥の山の
詩をもてあそびけるに見かへりける

呼つぎれ名にいざよひの月見舟

螻蛄伝

螻蛄が子虫はよく飛べども家をこゆる事あたはず よく
のぼ(縁)れども木を窮むる事あたはず よく およ(游)げども谷を
渡る事あたはず よく穴ほれども掩ふ事あたはず よく
走れども人を免るゝ事あたはず 是をこれが五能あり
といへども一つとしてなさればふいつりとしてこゝに翁あり 詩つくり
ても詩ならず なにもなりてもなにに似てあらず しもよわれ
詮なけれども つたなく俳諧をなれども下手なり 我その虫なり
おもしろやとて ちかく螻蛄とて名のりけるや是なり
とりかへさる身のかなしきとありて他よりも忍びいでゝ
試みけれ人の螻をもてあそびさまを物の名も捨てゝけるの
つくみたる子なければよろこびてそれは捨
ちかへくとも我は笑ふとせんなりけり

二日月堂記

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　廬大夫松成叙係書

さる故人の身にならせし調べなれのこゝろ絡をも
かよひ地をきらみなれと世に窮屈なきかれ
あるふうをあかきそとわかく身せる事そてゐさらひけ
むつかし品よし人のこゝろの見かりしを他はましきなむ

さるをいへりされども誰か一生の事とくらぶあれど
此府下にして何し俳諧の道をたのしみとさして其うち
まぎれざるハ、さゝ宗匠此一句のさちあらん桜多の詠し
物の上にハいろいろの武隈の松に至りて丹生の歌に六浦
のかみちに今ハむかしき名となるをさびしくも此
言れいよいよくの月をのぞんにみて眺望もなき世にこそあれ
も昔をしのびれ志のよ人の是れにハこつて来てあかさる
へきさるを為楽身のかけ打ちあるをとして詠まる
堂に名つけて此句に光いやましにかけしより
雲上の居も為庭に魚もうまと游ぐなり狗とうさるに
おして再も続見ても一夜さらして二夜月ハ古名れて
この日月の三日月あるをみるけハ世ぞんふうすしく
いつも此寺に隈なからむとて

桂のまに磨つくもつきし三日の月

画像賛

ゑふ古池の波をひろけり蛙ハ桂井に書きありるあ
詮の手ハ月の光あかねも新しき風雅の世にあらむ

音曲説

夕桂郎詠といへるむかしハ遊びの宴にて千ゑの
備へる楽名にいふものハ我つあまきりうるも般しさまく
幸若うら宗民舞といふもののすうにのこるもおほ
よつ一二一夜書人の告もたへし二夜と告へしるも定えて

りはやく謡ふ事の上中の下てあるひはすりてなさなり
されハ至りて法制ありのり悉くのさはりなく古今まで
変なし されとも是を能く人もよろしきうちにさまり
くさく商人のよきものなと次第にそのきはきる御用
をもちてあつまるなり盃の底迄もはかりそこなふ世の
さるをきいさく盃の席へハその職ある人のみ出されて小紬
と上下の役ハ定らすとも時なりぬ足袋をきてらへひと
さしも出すもあるへし一座のさし合わるきの文句あらハ
むつかしくいひて盃なれともあふさしかし眼を配る
なと扇ハ膝の上に斜なりあるハ乱酒の手すりをにきつて
やうてなみきりとよりも小謡なと声打いとなみつらねまて
一座声をあハせて中々も雑の心なるを聞はすか
こころしく雄子似つかぬ中なるもくその心ならぬ人ハ
無拍子なり落しくらなきなるハ口相しらぬやうに
これ声そろへに出たる所聞き無量の安心にも自由なりしく
拍子なんて辯財天ともいふるのかなりといはまことに仁新
なるに似あふにあまりなきものとてはなしとそ申なる
いひくあるもあれもありける
されと世にある人の身ハ心をもて向上にもとつきて
浄るりといふものハ洒落の道をしまりてやあつかんまし
さる五十年の山しハさてそのくらうより一人ありし
ましても一統をあ能に名のりみさい姫君の名前も
こころまさとしめしに今世ハ年々月々も新手を
あるひハ義理を虚実の入組く二ツにの謎よりハ

むつかしく不飲込なる老人の耳にハ善も悪もおなじく
として三階目の愁にハあかりの顔を詠らしてうら
語るゝ外の事をそでちときこえをすてあそよ人の外の音曲
ハわかりかくなひさしくるハ上手めきそらにうるハ心
をよりそもる白猿庚申にむつかしく燭臺の陰
に衣紋をきつくろひ翠簾あるやうと例月にうけく
こそつくりてるよなれいやらしさはみすにも息つきとけき
ありし汗のこぼれ湯をのこしる桶よりうたちと人の
つきあわひさるけもひ世にあるといひ出るくしてそあと
よきハうしやむむもあるむによく美人の上をきけて
ゑがくハ居よろこびき出。秋の動揺もおもうれ出るよ
系組のあと後にハみさかりるをもえあきしきとあく

工商のうゑにありしく年も三十あまりまでせうさなるアし
音といふもくへてうる名目なるへきれとよ今をあつむる筋なるは
さゝ手ぶまさし先祖の異ハなるあり古今も一様なれは
琴の組なれハ上代のまゝかよく不易のさいなるに今三線
にあやなるさうひハ流行もそうらくもとよりたる文句も
百端に音節さまさまありあらし本調子ハさとへ〳〵女の
さけ盤にうちうけしよるこそつゝく二上りハ賢當流
にとりあけ姿もひきつまへにてるわかりこそりハ善う
ありさゝに似されとよろしく化粧あるさきはやしする
よるもハ猶さる人ハこゝろに涙をも崩しく中に淫奔
の媒といふなりぬへしもつともあそりさる人ハ耳
にこれとなくさみとなるこつうかにハ弄しとして

やさしさこそあるのなかハ猶あけなくてうたふにへたるも
あるひハかの牛の角を敲きて田のあぜにうたひあゆむ
或ひの一ふしハ今も月夜の門なとにてハさらにきこゆ
あるへきか鉄を鍛しくうたひしすくハおもしろけなく
すなハちしりかいきもちて のたまひハさしく風俗
さし東にとるものあらすなくに賤の男賤の女のうへに
しるておのハたてうさき義をしらる也すさひハさてこそ
猶かくいさゝしき物から漁歌の棹歌のと古人の
いへるハ波間芦間のさかひしきみてなすてハあへさる
へし山更に出あるに樵の斧のきこえくるハ伐木の
丁々たるのりもまさりあけ聞ゆるにきこえ咲く
先生花のうつろふのうつけあるよりさらに中山辰まき

ありけくるこの欠まじつたにうち出る一ふし
楚客の漂ふところにてうけまへし四うへの麦秀
白撥にさすなふくいさゝらかくみよふひありて耳に
尽てあすりいつれか義あるさるへき和歌にハさして
称せされとも詩家俳人多くハこれに情を詠せり
平家をかたるものゝうたくまつハ琵琶法師の家にのこ
傳へてあり其やうくるのもとのりも似たる其文章
の義なるなるも似たる筆のすかれたるかもに似た浄瑠璃の
あるくあるなるも似たる人ハ甚すたれすく人ハこゝに
きゝもり哉に友あり主人のいへる猶老にあんくとして
かの謡曲のむかし一つも身のうたに唱ふるし されとも四季
ハこゝろあつく信長ヘこゝろとも和歌の記録なくて

懐旧覧古の情ふかく謡のねをつくりなすに
まされりとおもへり人のありうるく独唱からん
かきこもりゐてむかしにしのぶ三の友の一つにはなりけむ
へられとてその手法にあらぬ一面乃琵琶を抱いて西
の四月の夜友務の傍に燈をかゝげは人いさゝて平家を
語りてや居らん我ハひそかに老僧の稽古をとゞむるなり
といへりされその琵琶も母なる札叉よりつたへて来
る事ましき糸筋なかり撥面に三月なり乃自
さし出て桐の一葉の散るれを我葉にて見よとみて
これまさにしかも句ひとつとこそもとめ

膝寒く琵琶のあつきや秋の暮

細雨亭記

市中をはなれて遠からずして枕頭に幾とせか湯を膝に
見を常に市中をはなれて近からずして家庭に松をまへく
蓑を求め年静なりここにおの地を求めえて聊膝を容る
乃幽居をいとなむよしの畏いとひもせらん我せめ
あはれしくかなしくハ花咲あらひの岡なく見へは
まことにあはれてぞ老の春をしるなるやと人忘れず
ふる事りかとての山茶花の名の原して四望して風
をしるさき三径をつらぬ草を拂ふここに汲べき山の井あ
けまして井戸ひとつこしてこれのつくハおれあつりハ
夕からの小家から夜半て梳子鷄の晩を告げおのづと
とうゆるなり声しくひさすとききりとみてもあはれ

門を出て東北の方へゆくこと十歩の杖を曳けば指顧
万葉の山横はれ眼下千町の田つらなり村落画図
の中に入る南ハ高きゝるの森高く鳴る波の浦風もかよひ
ちや勢田沼も程近くして夜ハ夜すがら目もあはぬ
やく蛙の鳴声ハ細りく寂しき声虫の音さへ
よりハ遠き地なるハ秋雲の里も近くれてあるし
年ふれ年ふる坂の杖に近くねぐらも万葉高き近
あとはすめりうき世れ書には一日二日も立やくなるを
さんたに片里あらうさされたる知雨亭とよ
するの藤氏が春雨をも待ち行り黄門の声も
近いすゞ口にこれ定居に似されたるや鳥啼の声
ともあひさへこゝろにあらさまあるらハあられものし
侘なるを我ハむすびてさまとこしもまた府城の辰巳
にあれど世をうぢ山と人ハいふらんかし

百魚譜

人ハ武士柱ハ檜の木魚ハ鯛とよみ置る世の人の口
ことぐさのならはしある物からあれども此魚と
かて調味の宗上てさむに登るあるへき気まけく甚
に春る男ありさし外に似るへくもあらし去りとてかろく
にハいかにしてもに賞翫の海河も守らる里に字
なし他人もあらしされも夷三郎左衛門の武者に
同もけをさて其もて鉤もされなく龍宮鱗の司
といふハ食味なされさる理居なしくさハルことと料理

もんと学ひする人ハむし　愚なる者をもしてとゝめ
ける
龍門瀧のほとりとする魚あまたおほけなくも大聖
の法にあしはゞ名を加へさせなりるされハ世の名声ハ此の鯛に
並ふ色とすりされハいつなる幸にかあらむ味ひ義なりと
いつくも鯛の料理の品をならるにハあるへくもなし　乾鮭
魚なれたる鱠をまし清汁によろしくとすへし　蒲鉾
に用ひらく鯵なとも鯖にも調せる呉すし魚あつかひにとく
まるハ鯵なと恥としむんと守りなまれとぞいふるにや　昔
平家に悪七兵衛景清と名のりて今武道にハ這子など
威をへく桐比奈か芸に肩をならへんとするきつる記
録のうゑにしてハきこえ糊蒐の外ハさせる傷なくて

二布あるもいはれもおすりつるな侍なりけるに世よ
名高く知るもきはもある人錦しなるとのありなれ
さく七家に輩あるへし
松江の名声我朝にも及ぶなりす張氏ハ是を秋風に
おもひて仕途を辞し平家ハ是を船中に躍て官位に
進む進退いつれをとらうやむへき
鮒ハ近江に洞庭の名をとかへある鯉に似て位階ある
是り名にハ紅葉鮒と呼よしれと鱠ハ書礼賞読けて
去れり
鯽ハ羊代谷の比もてはやされ梅咲ころへ世に重
鱸ハ初秋に祝はれて空世の蓮の葉に包み浄生
菩提の契もとのかし

鯉ハ芥子鱠の風味上戸ハ千金にかへてもくるしからし
と謙信此法の妻性を兼かねにいひさされたるよ
にあらし鯉料理とすりてハ本の鱸の字からしこそ
その指とも見えまとしく花の名をさくせにたとへし
なる
鮟鱇の唐めきたく子細らしきまつるし切とふいふもく
しく望料か料理めきたり身ハ本汁に出くされ
鰒ふくとて二の汁の大将として摘手をそうけのかぬ
かしハ文字の職居によりは紫の上には鯵(カハラ)とめてさせ
あひ中宮の御機嫌にはこそに鰍をやめさせもあひらん
鮭ハ越後よりありて其國の名をもおとりゆかハ入申よ
雲はなく得かしく照さるとそいかみしり鮭さまく

鯵しくかめのもとのりよハあけしやいとしんと
狭衣ハ八百の山のうちハ鰻とかたかれハ有情乃
非情とありこれハ非情の身にかれり反するにて
世に益すなく鰻をすゝて調法あし
牡丹ハ花の一將として賞せられ梅桜ハ手枝の葩を束
ねくなをも皆それか勝負とても劣らずする
衆寡の論にハ及ひなす白魚といふもの世に出て
をやさまりハかの鯛鰹の大魚に比されも名ふ梅桜
の名を等しきかりに國俗にしたかひ異なるたる
魚にても名を魚といひ名をいはれたりとして
名も菊とも名ら鰻をといふて名ら魚といふを
なりあといひて名へかのすみをさし出すいたるよ世に

しら猫もしら鼠もいふましくゑからにこまれる
あれ物定の侍士しらく跡なり
鰷ハ粉川の簡次に責られ鱠ハ濁江の瓢箪におとく
にる比目魚ハ足のに裏表とあらし海鼠ハ记す
先もなし
歯みもさまあ忠いの骨ハ何の為に持るやされ
海月のよつまこハまさかるり
てふ蛸の入道ハ毒に入くとうてして悪きに非ず
の戯書からは文字より生も使ふべきと一体の口にハ
わらられなからまさ和の法師の身の果なり
あるしらとい名れかてくして素食の従僧
くりれはるさうと石陀もいふものかは（註）枕もいく

世をいさきりかてあさましむを益なきとなしふさく
口をしとや云ふらん
鰊さより（細魚）ハさまふきん怨でもる大男の髭にそらへて
かふへきとしも思えて
鰒ハよく鍋る比乃面皇(?)かき果ハ砧に好色者を
くあるに便よき人ハまう(?)き新蕎麦喰ひけるなれ
あのかうされくうらやましき法名かん
泥鰌ハ酒のさかなに赤味噌とよく調しく売るし
なべてるしたよられ白味噌からなる大こや人ハいまま
喰るんとさへ思来なし
鮫とハ先名からつかあり いかく無比の美味を忘
てあやしき毒とかかりなむその味ひと毒の世なり

されとも人をあつかふ家もいふかひなく人を
あしらふ別もいへり
鱠といふもの味ひこまやかなれとも崑山のた
に玉を礫にうつことの多かる故にいやしまるゝ鰯
田畠のこやしとなるとも或ハ門を守りて天下の鬼
を防く至功鯛鱸に及ふへからす
されとも我人ハ魚に四季をわかちて魚に四時の部
類を分し俳人兼て魚を品題とするハなかなか味ひの
賞翫を捨さるなり されとも翁よみハ耳目のたよ
りによりて今ハ世界なりとてとかく似られと
かの翁ふかき好事をおもひいれしよみて葉の花乃
うつくしきを翁の俳諧に及ほさすハ詠ませぬなるまし
さるをや翁わに口借しと人のいひけるさまあまき詞
なりけりとそ

案山子辞

かゝる世ともおもはて いねの葉刈あて山田の畔に
ひとり立てる とし あまたむれたる雀を落穂ひろ
ふるに倒の口さかしくひとりいう ひるハ誉由ハ西東に柳の
とまりし武家ハ弓弦を雲乃うへにひゝかせ剣段ハ鞘
を射るその外武柄名士乃弓箭に功あるもその
おしく世に名をうるハりなんぞやあやしの竹に縄をあり
て射るの志をたまへて我業をあさむかんと
するや案山子ニ是ニこたへていふひとなり 矢

ことく射る時ハ中られさるもなかれさりしことよみ為
身の外を忘れをりしその奥州の与一弦も矢も放さはして
猿臂ありけれハ麒麟ハ角をそなへたれとも肉ありて柔を
やしなひむかし太公望の宮討も木太刀に弟の紙をのせて
しそうしたる人ニハ武勇も出つれ志わさくもならなり
さる丸ひさく後その功をあらはさむとする悪狂の士ハ不実
といふものの形といへるとはかりや九万里に翔らんこと
翼垂天の雲のことし折りから一陣の嵐ひとつ吹ちらし
よくそのみをさゝふるにあまりていはゝ我をみつくは数
しくみちりに笑ひとせらるゝ若なくともはよいはされ
されの大鵬の雲を羽うつハ荘子かれ例の大嘘にしく
月影に於てもなく実なりしそその
実をはらくいふも世に露といへるものの年十七の齢
こつれる出てもゆくハ竿紙をてハ冬ニに居られ稲ハ
矢にのり出穀ハ毛をもとにしく何かれの嵐にして身は
求めの時の頭ハこと出らとも縦横して其功上に出るにハ
されとそその夢のうちくれさる翁ニ芽の餌をと
あくハ出そとつかられ架にならひさまよく雲とこその
葉をとまゐられとて志りし世中の人ニハ葛のれ秋のニ一枝
のかゆて求て浅茅か露にかくもやそつらむ大ハそあを
汝か身にあきたて稲かきみをすてもしあしや五湖の
棹さして蓑笠の庵をなくハさるや他をそしりて我を
きうさるハ昔にいふへかれ昔うくひそハ身をよみたれ
もとよ出不花の帰ぬかありあらしとて

捨時をしらぬ案山子の弓矢かな

と詠りくしら山とけ案山子猶ふひとめく汝かし
こゝろに似たく又ころもとしられてもゆゑを詩歌や
萎をとりしかや其句れ也しみハあられさ此句哉
まけしくまうた

笠ハ笠これハ蓑にてのみわれも
あらなハ何かかしまかなむ

糸瓜辞

むくつけきみくへもひさてといへと伏猪れやさしき人
花ハましてタクれ人あまてよきにいふとひすのへつ
りそくみせを蚕ちまと名のりなるより源氏の巻にも
まくはましてぞよみハ此君にかくてあつくひらくこゝろ乃
料理にハつくり出さるてわきうし捨くるとやかく
俳諧师乃いろいふとうらく己か垣根にハ這せけるみなノ
その味ひの更にあきらむと称りあらさまを賤もせくられ鉢
坊主もみなくらひても講の人へともうさらす

茸刈のそしるときけく糸瓜かな

様又いろしき病気の薬なりとてこうしに此ぬ乃
あまたろあれなるたりしあれ深く頼もしく
楊柳観音のあり不ハしら生粟栖野相子ぬきる
きこしなきあしのひとき白らせ白露のらく去
みハ医者の家なるもあるへしされとも香
とも知られて知る人ぞありぬるらし

垣に並ちまさてはあましも庭九拾

百虫譜

蝶の花に飛かひたるやさしきもののかぎりなるべし
それも啼音の愛なきをもて籠にくるしむ身ならぬこそ
猶あはれなれさてこそ荘周が夢も此物にかりたれ
只とんぼうのみこそそれにはやゝ並ならぬ身につる
うち黐にさゝれて喜れなくてあそびともなるなりし
きゝとあるもの〻羽毛につるゝくはいとをしき
蝶が美人の眉にたとへらるゝ蛾といふ虫もあるなるを
みを捨てゝあるものはその美形にひかれてしらず若気は
あれ蜂の他の虫をとらへて我子となして老の行末を
たのむとするもあはれに何と違ふとてかはゆからむ
我に似よ似よといふなる身をたのみおもへるにやあらむ
花に狂へるとは詩人の称なしくわが身にいさゝしもよみかね
蜜をつくりしく世のなかにほかれよし医人用藤有る薬師
堂に大きなる巣作りて掃除坊主をおひやらんとて
それも針あぐくは人にはあくまれしを
蛙は古今の序にかゝげて歌よみの数に入られたる
さて幸あれ鶯月花風流の道にかく遠く鳴ものは
よし古池に飛んで翁の目さまし されし只物のたらぬ
ある讃へし
蝉はさしも月暗にやまずなるをきゝて遅きとやいはむ
さかりに啼つるは人の汗をあふる地とぞされて和嘘

とも初ハつとむといふ事をきゝれ此物より初せみ虫
いかにして大きなる事あるやらくらぬかしきを
ろくまて此物のうへハ翁の一句よ残りしと述し
おもふハいらぬへきことのもなく京都の宮上なる一しおる
とひらハ芭蕉にそえて名月の雲ハさてこの物の名をや
まてなそ學者たちに負の学者にはあらさくしよ史の代
せられたる此物の名ハ蛇にハあらさるへしよに蛍虫
ともかくも此ハこの外の自由なり俳諧にハその其似
をへけれ
日くらしハ夕きらやうましくすゝ暑さい成れ梢にて
夕ハ茅よ鳴とく終につくゝくしとも世に
つくし与しともいふし芭蕉の人の旅に死しく

幽霊にまかれしと世の諺にいへり又蛙ハ蜀魄乃
聲に叫ぶなと知るへけれ
蜘蛛ハさゝ事網をむすんてひとすまて物を害
せんとて謀られ乃なよりよ世又ハ退隠の媒とも
なりられとひとしくよ奸賊の心あるくいとふくし古代
刹歟の始とかく米光をきくへおもひやしるへ
おもろしさふいへ廃宅れ荒るる軒よ蛛の羽なと
かけ捨るいさゝかあられそよわもあるんかかれハ色
くもく巣つくりくまそあれ東海なとよちり
あひさる宿なし者をは蟻よハいうくいふやらむ
芋虫ハ後ろなのにさくへ毛虫ハむつかしき歟に
乃号よれ脊むし名むしハ名のことしく虫

なかれ沙むしとらの穴ハ虫にありてふかくまれど人に
ありくきらへる
蠶乃生涯ハ世の為に終り火とりむしハさらさうに
身をこかしや蜉蝣ハさらなきさかしにひかれ夢
なむしハふ稲てき乃詩となれりさて俳諧なる
ものを俳諧せぬ人のくいふおもあるへし
おなし宝の名によられて玉むしハやさしくこよ
虫ハいやし
蟻ハ昭られないそしく世のいとなみに倦なき人にハ
似たり東西に聚散し餌を求てやすむていつゝ槐安
の都をのかれて其身の安きすをもとめむさるもさより
あきろうに穴をいとなみて千丈の堤を崩そへるに
蠅ハ歐陽氏に憎まれ紙魚ハ老蒲子にあはれまる
狗の歯に噛れ蚤ハまくらして猿の手にさゝえ
らるゝ虱ハのゝしらるへし
虱を千手觀音と呼ふに蜻蜓ハ極楽とらへつさるに
極楽の異名なりやけらしの異名なりや生存会
ありとし
蝸牛ハ只みにをんきなくいつくまて家に社からん家ハ
持られとも中く先へと頁ひあふなく雲の安き
のも似そて
蛇蜒蚓の足なくてもあるくへくハ蛞蝓とさむし
の類なきハ無用のものなり
蟷螂の腹ふくらも斧を持るなこりよりそのかし

いとかり人のこへにも似たるといはあるへし
蟖のあまみにたとふへきよしてなされこ京喜ゑ
を架しのかく富士を詠まく人には似たり
促織給出なるむしは其音の似たるをもて名付
たへる松むしの名をもよくていてく名をなす
くるあるらん毛生ひむくつるき虫をも同し名あるよ
松を枯し人にたとまる一下在所にかなりの八千歳ありて
ひとりは活生をねらひひとりは殺生をなすとこれ
松むしのたくひなるへし
きりきりそのつりさせといふ人のたよう教言をおもへ
蓑むし虫は我かくこ鬼の衣なけくらんを蓑
虫乃父よし呼は其母の妻ををなは似をされ少

父のこ……ちちよ母をもとはさうらん
姫はみつはむへき恨あらうきしく卯月の比鎧みたをく
しきりアちしめくそのにきこえむ又は七月の
比ほうあるのこうるはさむしきこえもあり姫は
約さる家のさ母姫より焼黒の烟なとかつは風雅の
たくふもあたり蕣姫は強にもけしきとうの女蝶
の挿出にいりる園の深あかりなむ
むし　根子独仏のこゑし　任按は螳とありて銭名
とまるひ花丹あたるし　佐國は蝶となりけく園子
おくる俳諧にむとし　後の身いかなる虫よかなる
らん花にうるひ月にうれく文行の記をさへ
あり葉蝶白ひにさるを停らんとて哀なるへかれ

3年12月

この續々編ハ世有翁寛保のはじめより
寳暦の[illegible]の比までの遺稿をあつめて
抄出ス

素僕　小林

[illegible]

この續編ハ世有翁寛保のはしめより
宝暦のおハりまての遺話をあつめて
抄出せし

末孫　六林